

A. 講座での〈質問の時間〉

(質問も応答も、聞き取れない部分があったりすることから、編集者の責任で、ある程度整理してまとめた形にしておりますことをご了承ください)

〈①〉 私は「コロナ」という問題から、私たちは問われていると思うのですが。

〈ケネス〉 それでは、Aさんの場合、コロナからどんなことが問われているのだと思いますか？

〈①〉 私はコロナというものは、仏さんから何らかのはたらきかけがあって、今のこの状況が生まれてきているのではないかなと思うのですが。

〈ケネス〉 今、Aさんがお話しされたことは、Aさんの「一人称」として考えるべきではないかと思うのですね。というのは、コロナによって亡くなってしまった方もいました。そういう人たちに「これは仏様のはたらきだ」とか言えませんか。今日の講義の中で「毒矢の譬喩」の話をしました。私が刺されている私自身の課題であるとして考えることが大切です。

私の場合ですと、コロナ禍の中で、どちらかと言うとピンチをチャンスに変えることもできています。だから、かえってプラスの面もあります。仏教の智慧というかチカラというのは、「転心」されることによってピンチをチャンスに変えることができます。だからこそ、私たちは仏教の智慧を身につけることによって、「人生は本当に素晴らしいな」と受け止められるようになりたいと考えています。しかし、それをすべての人に押しつけることはできません。大切なことですから、私としては少しでも多くの人に、その智慧を共有したいと思っています。Aさんが言うように、悪いことでも何かを学べる面があるのだと思います。それは大切なことであると思います。

他人の考えや行動を変えることはなかなかできません。比較的容易に変えることが可能なのは自分なのです。自分の外で起こることは、縁起（移り変わる時間的・空間的条件等によって成立しているという仏教の道理）によっているのですから、それを完全にコントロールすることはできません。けれども自分自身が内面的にどのように受け止めるのかということは、私自身がコントロールできることです。それも容易ではありませんけれども、だからこそ、自分の心のある程度訓練しなければなりません。それが「求道」ということです。私たちは凡夫ですから、それほど立派なことにはできないかも知れませんが、求道の生き方を少しでも前に進めると、以前よりも「ああ、この人生は良かった。人間として生まれて来て良かった」という気持ちになれると思います。

〈②〉 ミャンマーでは軍事政権によって今、大変なことになっています。歴史的に見て、仏教国は一神教の国に比べて戦争が少なかったような印象を持っていたのですが、仏教国であるミャンマーでは、なぜこんなことになってしまっているのかなと思っています。先

生はいかがお考えでしょうか？

〈ケネス〉　どんなに仏教の影響が強い国においても、そういうひどいことをする人たちというのがいるということなんですよ。仏教国であるカンボジアでも二百万人もの人たちの大量虐殺などのひどいことがありましたよね。仏教の影響は強いけれども、その社会の人たちが仏教を信じて実行しているかという、そうとは限りません。日本に当てはめると、仏教国と言われる国でありながら、他の国を侵略した歴史があります。アメリカでもキリスト教の国であると言いながら、同時多発テロ事件が引き金になって、イラクに行って余計な事をして大変なことになって、たくさんの人が迷惑しています。

中には仏教的な対応をしている人たちもいますが、残念ながら社会の組織としては、軍事とか経済の影響が強い。仏教が中心にあれば、そういうことが起こらないはずですが、これが娑婆の世界の現実ということ。また、少数ですが、中にはひどい僧侶もいて、イスラム教徒のロヒンギャ族に対して、暴力を扇動しているようで残念なことですね。仏教徒であるからとか僧侶だからと言っても、必ずしも中身の保証はありません。しかし、私たちのようにそれに加担したくない人たちは、できることをしっかりとやるのが重要です。Bさん、あなたは どう思いますか？

ミャンマーの問題は軍部がやっていることですよ。仏教だけでなく、真実の宗教には三つの要素があると、私は今までの講座でも何度も言っています。つまり①慈悲や愛、②平等—他者を平等に扱うこと、一人ひとりの尊厳を認めること、③—一体観。これはキリスト教徒もイスラム教徒でも、教えをちゃんと体得している人であれば、そのように人々を扱うはず。けれども軍隊に関わっているような人たちの中には、その三つの要素がほとんどないような方が結構いるのではないのでしょうか。そこが残念なこと。仏教は素晴らしい内容を持っているけれども、社会全体の中心的な考え方になっていないということがあります。

③ 『般若心経』の中の「色即是空 空即是色」という言葉について、アインシュタインが説明しているということをお本で読みました。科学と仏教で説かれていることが相通じるということなのですが、どのように先生はお考えでしょうか？

〈ケネス〉　実はアインシュタインという人は仏教のことを高く評価していたのですよ。未来の期待すべき宗教の一つとして仏教を取り上げているのです。科学の求める真実と宗教が求める事とは矛盾がなく、一体になる性格を持っているのは特に仏教であると観ています。「廣大無辺の宗教」が将来には必要であって、それが仏教であるというようなことを言っているのです。アインシュタインは「目覚める宗教」としての仏教をかつているのではないかと思うのです。

『般若心経』の中の言葉で、そういう説明ができるのかどうかは分かりません。アメリカなどでは、仏教の世界観—「縁起」の世界観—すべてがつながっている、すべてがプロセスであるという、そして常に変化しているというような世界観が特に仏教にはあるので、アインシュタインは評価しているのではないのでしょうか。最近、日本でも科学と仏教につ

いて扱っている本が増えています。

ただし、仏教と科学の世界観は矛盾しないけれども、私は、その目的はちがうと思っています。仏教は悟り、解脱、救いということが目的です。科学はあくまで実際の世界を理論的・知的に理解しようとしている。目的は違うが、科学と仏教は対立はしません。

一方、一神教の宗教の場合には科学と矛盾し、科学を否定する面があります。例えば、コロナの問題に対して、アメリカのキリスト教の原理主義者、福音派の人たちは、科学からの知見を聞こうとしない人たちがいます。アメリカの三分の一の人たちがコロナ・ワクチンを受けないと言っているのです。その一部は福音派の人たちで、科学に対して不信感を持っている。考え方がバッティングする（ぶつかる）からです。神が創造された世界と科学の世界とが矛盾するところがありますから問題が起きているのです。

アメリカではワクチンについては進んでいるのですが、三分の一の人たちがワクチンを受けないとすると、なかなかコロナ禍が終息しないのではないかと、私は心配しています。現代仏教の世界観においては、そのような対立はありません。

〈④〉 自分の人生が終わろうとしている時に「ああ良かった。この一生は最高であった」と思えたら、やはり一番いいですね。妙好人の人たちの残した言葉をいくらか読んでみると、そういうことがよく現れているので惹かれています。

〈ケネス〉 それ（「ああ良かった。この一生は最高であった」）が、私の言っている「悟り」や「救い」ということの一般的な表現なのです。悟りとか解脱とかいう言葉を使うと難しくて手が届かないような印象になりがちですが、素朴に「実際、何で私がここにいるのかよく分からないけれども、この生はすばらしかった」と受け取れるということでしょう。感謝を感じて、いろいろな体験をしていろいろな智慧を得て、もちろん苦労もあり悲しいこともあったけれども、それをすべて見据えた上で「良かった、有意義であった」という気持ちになれる。

それは親鸞の教えにおいては「信心」ということになります。「信心」というのは親鸞における「覚り（さとり）」なんですね。煩惱はまだたくさんある。けれども、煩惱だらけの私が「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と言われて、生きている間も、この世が終わっても、大きな慈悲のサークルの中にいるんだということに気づくことが「信心」ということの内容です。

〈⑤〉 先ほど、先生は「仏教の世界観—「縁起」の世界観—すべてがつながっている、すべてがプロセスであるという、そして常に変化しているというような世界観が特に仏教にはある」とお話をされました。この「すべてがプロセスである」というところを、もう少し詳しく伺いたいのです。その理由は、仏教と科学について私が話すと反発されることがあるのです。そこで「プロセス」という言葉がキーワードになるのではないかと少し思ったのです。

〈ケネス〉 伝統的な物理学では、分子や原子など個別のものが存在していることが基本になっています。けれども、アインシュタインなどの現代科学が提唱する考え方というの

は、すべてが個別のモノではなくて、「はたらき」というようなもので、常に変化し続けていて固定していないという見方をしています。世界が個別の積み木のようなもので組み立てられて出来上がっているのではなくて、すべてが「流れ」であるとか「フロー」「変化」であるという見方です。「変化」ということは、つまり「プロセス」ということなんですよ。

今日の講義で「五蘊」の話をしましたね。その見方は、身体も心の思いや感情も変化として捉えています。仏教では全てが「変化している」として観ているのだけれども、私たちは固定的に観て、そこにこだわることで、実際との間にズレが生じて、なかなかその「流れ（変化）」についていけないということです。

〈⑤〉 そういえば「五蘊の図」には確かに矢印があって回っていましたよね。

〈ケネス〉 心も流れているというか、刺激し合っていることを矢印が表しているのです。「縁起」ということは固定していないということなのです。『般若心経』にも「空」という言葉がありましたよね。「空」も固定していないことを意味しています。固定していることを仏教では「自性（じしょう）」というのです。すべての物事には自性（svabhāva）はないよというのが「空」という言葉です。龍樹（大乘仏教の代表的な論師／中観仏教の祖）という人は、自性ということ否定したのです。すべてが変化であり縁起であるということは、「自性」がない、つまり「空」であると説いたのです。だから五蘊中の「色」も「空」であるし、五蘊のその他である受・行・想・識も「空」である。変化して、つながって、流動的であるということなのですね。

B. アンケートの質問に対する回答

1) 運命、宿命、寿命…。偶然、必然…。仏教ではどのようにとらえられているのか知りたいです。方位除けや厄除け等をしているお寺もありますよね？仏教と占い？生年月日、方位の関係は？祈祷は本来の仏教の行いではないのでしょうか？初詣や結婚式、祈祷等における神社との違いは？初歩的な疑問ですみません。

ケネス：釈尊は、「宿命」を前世で行った行為で今生の全てが決まっていて、今、何をしてもどうしようもない、という考えを否定しました。なぜ物事が起こるかという点について、仏教は科学でも認める「因果の法則」を採用しました。例えば、2011年に起こった東日本大震災の原因は、「天罰」でもない、「宿命」でもありません。科学的説明は、太平洋プレートとアジア大陸のプレートの摩擦が原因だったと言います。仏教徒としては、その説明を採用することができます。

方位除けや厄除けという祈禱的な行為は、本来の仏教とは関係ありません。どちらかと言えば、反しています。親鸞は特に厳しく否定されたので、浄土真宗のお寺では祈禱はもちろん、「現世利益」（ゲンゼリヤク）的な儀式も行わなく、ご利益グッズなども扱っていません。

そこで、ユーモアです！ある観光客が真宗のお寺に来て、「占いっていますか？」と聞いたら、「いいえ」と言われた。そこで、「では、お守りは売っていますか」と聞

2A)親鸞の考え方、生き方のどこに一番ケネス先生は魅かれておられるのでしょうか。

1 時間があっという間で、とても興味深く聴かせていただきました。ありがとうございました。ずっと親鸞聖人のお話をきちんとお聞きしたかったので、とても楽しみにしておりました。次回も楽しみにしています。よろしく願いいたします。

2B) だんだんと講義の中で明らかになっていくと思いますが、先生は親鸞のどのような「人間らしさ」に惹かれていらっしゃるのでしょうか？もう少し具体的に教えてください。すぐにでなくていいのですが、キリスト教の神と親鸞の阿弥陀如来の、凡夫の捉え方を教えてください。

ケネス：やはり、自分が煩惱だらけの者でも、阿弥陀の大慈悲心が、「大丈夫だよ」と受け入れてくれるところです。「煩惱」とは、例として、「死にたくない」、「なるべく多くの人に認めてもらいたい」、（親鸞も告白されていることと同じように）ちょっと体の調子が悪くなると「死ぬのではないか？」と心配することなどが挙げられます。

しかしこのような自分でも、出家しなく在家者の生活ができ、ある程度の仏教の目覚め・気づき（信心）を、生きている間に味わうことができ、そのお陰で感謝を感じられる有意義な人生が可能となることに惹かれます。

宗教の比較は無理があり、何を言っても充分ではありませんが、仏教徒のケネスが端的に説明するのであれば、次のようになるでしょう。キリスト教では、「罪はあってはならないが、それにもかかわらず（in spite of）イエスを信じることで神様の愛の対象になり救われる」と、見ることができる。親鸞の教えでは、「煩惱は当然あり、あるからこそ（precisely because）、阿弥陀さまの慈悲の対象になり救われる」と、見ることができる。違いがあるとすれば、罪・煩惱をどう評価するかと、いうところでしょうか。

3) いままでの講座のなかでもたびたび解説いただいていたことなのですが、四苦八苦の8番目の五蘊盛苦だけが異質に感じます。他は、苦の内容が明確なのですが、五蘊盛苦だけは、その苦の内容をどのように理解すればよいのかわかりません。五蘊は、色受思行識で、それらに執着することが苦につながるといいます。しかし、色受思行に執着するというのはわかりますが、識に執着するというのがよくわかりません。いままでのケネス先生のご説明では、色受思行のプロセスを識が自覚することにより、執着をコントロールできるという、苦を減じる方法が強調されていたように思います。そうすると、識を含む五蘊に執着することが苦につながるといのがわかなくなってきました。

ケネス：先ず、「色受思行識」の「思」ではなく、「想」です。「識」が自覚したり執着をコントロールしたりする役割をしますが、悟っていないと、その識も執着するのです。従って、仏教を学び実践することで、識が煩惱より解放され執着も軽減されるのです。悟りを得ると、識も執着から開放されると見ることができます。

4) 77歳まで生かしていただいた身としては、乗船「生まれたこととその意義」よりも、降船「どのように船を降りるか」問題。まだ来ない未来におびえるよりも、今を、毎日を大事に生きることが大事とは頭では理解していても、体が不自由になったり、ボケたりしたら子供たちに迷惑をかけるのではないかと、馬鹿なことを考えるようになりました。

ケネス：降船「どのように船を降りるか」、という表現はユーモアがあって面白いです！しかし、そのように不安を感じ得ている貴方こそ、「老」や「怨憎会苦」という「苦」を体験され、第2の段階である「落船」されているのです。将来のことを不安に思う、心配し過ぎるのも、苦の原因です。

ご心配でしたら、現実的に体が不自由になった時の企画をしてはいかがでしょうか？できる限りのことを「やる」べきです。その後は、お任せするしかないと思います。

精神的には、仰るように、「今を大事」にし、大いなる命である仏様にもお任せできる心を養ってください。それも、この講座を受ける目的の一つではないでしょうか？

5) 鈴木大拙博士の「真宗には、世界と他の仏教宗派に大きな貢献できるものを見つけることができる」とありますが、どのような点が、どのように貢献できると考えられますか？日本でも日本の国外でも、（大きな質問ですみません、、、）

ケネス：博士は、いくつかあげています。真宗がインドで発生した浄土教の最も発展した結果である、と見ている。それは、余分の要素が加わった以前の浄土教よりも、真宗は現代人により理解され易い教えである。

キリスト教の神と比べて、真宗が説く阿弥陀は「救世主」ではなく、無量光・無量寿である。また、キリスト教の神は、男性で「父」と呼ばれるが、阿弥陀は、「おやさま」で「彼」でもなく「彼女」でもなく、ジェンダーを超えている。

6) これから色々出てくるとおもいます。浄土真宗を勉強したら好転できますでしょうか

ケネス：先ず、「好転」とは、何が好転するとお考えでしょうか？もし「好転」とは、「心が安らかになった」、「ありがたい」、「救われた」などという意味でしたら、もちろん、好転することができたと言えます。親鸞は、「慶（よろこ）ばしいかな！」と書かれています。

7) 仏教教室の講義録を読んだり、リモート講座に参加し始めた頃、成人した子供たちから、「お母さん、危ない宗教にはまっちゃったんじゃない？」と心配されました。

ケネス先生について話したり、「お母さんの従妹の久子お姉さんのお寺が主催している勉強会だから大丈夫だよ」など説明し、子ども達もネットで調べたようで、今では理解してくれていると思います。食事は命を頂いていることを意識し感謝して食べるような子ども達ですが、宗教＝危ない というような気がするようです。また私自身、仲の良い友達にも「仏教を学んでいる」とは何となく話しにくく、堂々と話せない自分がいて残念に思います。オウム真理教などの危ない宗教に洗脳されることと、仏教を学ぶことは違うと思うのですが、違いをどのように理解すれば良いでしょうか。家族にも上手く説明をしたいです。

ケネス：これほど日本では、「宗教」が危険とされているのは、悲しいですね。まず、ご家族に「お釈迦様の生き方と教えを勉強しているのだよ。」との説明はいかがでしょうか？そして、日本では尊敬されている、空海や親鸞の教えですよ、とはいかがでしょうか？お宅の家は仏教ですか？そうでしたら、宗派の開祖の名前を挙げ、そのかたの教えのようなものを学んでいると言うのはいかがでしょうか？

「宗教」は西洋では、特にアメリカでは、重要視されていて、現在日本に宗教への偏見があるのは、「おかしいのではないか？」と、相手に質問をすればどうでしょう。また、宗教に不信感を持っている人には、「あなたは、宗教について何を知っていますか？」と言う質問も良いかもしれません。

最終的には、貴方が学んでいることに対して納得し、自信を持つことです。それが一番の説得性をもたらすのではないのでしょうか？自分に自信があれば、友達でもわかってくれるようになると思います。

8) 私は、落船してから、海に身を任せる状態に移行できる、と思いましたが、まだもう少し掛かりそうです。

ケネス：それが、当然です。やさしそうですが、身を任せるということは、そんなに簡単ではありません。しかし、この講座などで真摯に学び、実践されれば、その可能性はたかまります。

9) 質問に丁寧にご対応くださり、有難うございました。般若心経には「空」と「無」がでてきますが、その違いは何でしょうか？

ケネス：基本は同じことです。全ての出来事や現象や我々が体験することは、「変化」（無常）であり、「縁起」で出来上がっている。変化して縁起で成り立っているものには、実体（自性）がないと仏教は見るのです。従って、実態は、「無い」、「空」と言うのです。

10) ミャンマー問題を質問させていただきましたが、仏教が紛争を解決できないのではなく、仏教国の僧侶（ラベル上の）が必ずしも真の仏教徒だとは限らないという視点は持っておく必要があるということですね。心に留めてニュースを見るようにいたします。

ケネス：殆どの僧侶は、仏教に忠実ですが、極少数で、仏教に反する行為をする僧侶もいるでしょう。しかし、それよりも私が強調したかったのは、仏教のみでは紛争が解決できません。政治的な解決が必要です。

11) 大変わかりやすく、楽しく参加させていただきました。ありがとうございます。最近、縁を感じ、大切にしていきたいと思っています。今後ともよろしく願いいたします。以前の講義で浄土真宗は般若心経は唱えないとお聞きした記憶がありますが、これは聞き間違いでしょうか？あるいは本当に唱えないなら、何か意味があるのでしょうか？

ケネス：そうです、浄土真宗では『般若心経』は唱えません。講座では、仏教の基本的な教えを持って「苦」を説明したかったので、このお経を引用したのです。どの宗派も、拠り所にするものとしなない経典があります。真宗では、『般若心経』を拠り所にしなないということです。

12) 親鸞は、恵信尼と結婚したと聞きますが、玉日姫と結婚したとも聞きます。何れも正しいでしょうか。その場合、玉日姫と離婚後、恵信尼と結婚したのでしょうか。また、玉日姫に子供はいなかったのでしょうか

ケネス：私は、玉日姫との結婚は事実であったとは思っていません。それを裏付ける根拠が乏しいからです。

13) お葬式やお寺の説教で親鸞聖人の話も聞いた気がします(浄土真宗)。一般的にお寺では親鸞聖人の話は良くされるのでしょうか。

ケネス：はい、法話ではします。

14) ケネス先生はカラオケで歌いますか？ 歌うとしたら、どんな歌ですか。アメリカにカラオケはあるのでしょうか。それとも、日本人社会のような付き合いそのものはないのでしょうか。私は、もともと、カラオケは、あまり好きではありませんでした。しかし、いつの間にか、喜んで歌うようになりました。

ケネス：カラオケの専門店はほとんどないですが、飲み屋などの店に設置されているところもあります。しかし、一般人が人の前や友達と歌うのは、日本よりかなり少ないです。私は、歌を歌うのは好きですが、最近していません。カラオケでは、『二人でお酒を』という日本に留学していた70年代の半ばに流行った曲が好きです。これをきっかけに、もう少し歌を歌える余裕が必要ですね。じゃ、明日シャワーを取りながら、歌いましょう。。。。「怨みこなしで、別れましょうね。。。」。

15) 申し訳ありません。途中離席したため、＜マールンプッタという修行者の問いと釈尊の「無 記」＞の箇所について講義を聴き逃してしまったのではないかと思います。いつか、教えていただくことが可能でしたら、是非お願いいたします。

ケネス : 後でできる上がるビデオや講義ろくをご覧ください。

16) 慈悲と愛、平等、一体感について、詳しく知りたいと思いました。

ケネス : 講座を通して言及しますので、徐々に明らかになることを期待します。それでもわからないのでしたら、聞いてください。